芭蕉翁附合集評註　下

へ 5
1502
2

芭蕉翁附合集評注下巻

名月のもやう／＼まふに伝し伝ひ

玉 一ふでもなき紫の切袖

味噌の位流にかゝる秋北風

まふかくし伝ふといふに一ふでもなきと伝しらひけまじくふらひあふさびしさをつけさるなり後の句ふしを詳じく旅袖とし玉味噌の位流と枕詞のやうにいひかけさるさなハち俳諧なり附ごゝろおのゝ両なる執べきなり

此宿をまめいて画る　鮓の飯
すゝ田うねりて　夕立れ風
平目なる石を盗さるゝ水場
又じめれ白哉町ハづれの家と見ゆる附合
なり後の白もさぐりよ田家れやうさと見て
風呂場洞感などいふものもなく井戸端
ふくり水さるゝところやさてきれまゝ之
気立といへバ　盗もゆるし八里
ふよつと　飯ハふむらふ　横雲
お白ハぬけ気立といひて　釈兄弟ふもかく凡

ぬけ出る時ひそかに路用の金などぬすむるゝ
何里よらぬるゝあれど気立といへバ人もゆる
さるゝあり　ねなるはふかく　あるゝ
なり後白ハさぐく家をもぬけ出ゝ旅の
かゝりたるさま之
四五人　画る　僧去来なり
彩色町の子ども乃稽古能
お白春乃日此去来なる所四五人連の芝
法師のら修く所を去らんの町と見ゆく
薪の能もゝて去らんの子どもの能乃

稽古せるにまなびつけたる之菊足といふこ
とばの有としめにましけれど下に能といふに
てさししたる俳諧ありけらのつけごろ
ふかく数味を尽し春色目前
は局の里下しては　泪ぐみ
塗た紅より　おの出し入れ
お白は局の親乃もとより来てまづらへ乃
うたことでもかくり出てわが家のなつし
にに涙ぐむやうさてなり後白塗てくれは
に局の手足具なるべし紅の塗やう一手

後のやうきなどめなれぬつくしく吉凡め
たくる、まことにまづらへきる人の足具え
かの紅よりいろくのもの出しいれくもの
ぐつりぬるにて非言味にはふ手さたま
何となき白のやくなれどふかく心を用ひ
たるつけ合なりふかく心をつくべし
有明の七ツ起なる茶碗に
ひさご乃れをつけわたしたり
起出てひにぶれつける老人な
どの風情なるらむ

小僧のくさふ口おつくへまは
やすくと矢洲の河原れ歩行り
やすくとやすくいひかけたり人のとがむる
をもいとハず雨先ふ川をかちわたりまは
雅懐のやうきて小僧のけまふつけたるなり
かならず口おつくへまる小僧あるべしをうき付
合なり
萱草の葉もかりらぬ患をまく
秋たつ蟬乃鳴声ふ乃里
此句患を草ふたとへたるをうけて後句を
蟬ふたとへてせつなる情をのべたり
古びれてまた萱瓶乃露
蕣の花乃手際よ咲ろめく
萱瓶ふ垂露まぐくまじしといふをとしを
なる里付句ハその場所よろく萱ふ般ぐべての
花をにたハきたりかゝるつけ句ハにたひとい
ひてさぶろふどこをつけるといふすもなくた
ぼつらなきやうにつけるもの之比校つねふ
好まうす稽り学ぶべし
から句も病人何れバかきぬ之

たゞはやきよく　出る　琴ゆひ
なりし此附合なり前句病人の所る所か
ら臼をかりに来るといふにきこへわりきいふはま
なり後句ハ琴ゆひのひろくとはやきて
ゆるやうさてまたハ病人ゆるすを志める
との附合なり
名所の縁にもの思ひまさて
けハへどもよそへども君かつりこず
古歌らの附句公羽ならで徒らつくり坂屋た
かく思ひの意をよくのべるものとふと金

見わくよりかなふまじき意とハ志へりながら
前へつてもわきれまでおぐるに名所の白思
ひかけぞもえずめく出は ひものいひたる縁
よりあほく思ひがさきおもひよなりくる
なり法手ごもしとよりもしく思ひやすくいろく
とけハひよそへども君ハ志らぬ訳につれなきこ
ゝろなるをうちうらめる之宗匠ハ古く不意
の句上手なりといふすむべなり意句といへ
だいづれもしたゞならん人意の及ぶに
ふはらずですべく意句ハ大くすありふく心

をつくしたるべし
田家の稲をはらふ月夜にて
風ひえわたる牛の子乃旅
附合ハたゞ此の場所よく牛の子を引(ヒキ)よく
他國へ売にゆくさま推しのさまなる
死までハ人の何になるべき
秋風や吹起れとかい覚ぬ
去れハ二句ともよく似て常人のいひ出づべき
事ハあらん然ども面白き人ハ死るまでとうけたれバ
いつまでも生なバ何さましからむとりかゝろ

をうとふもちなくおもてよハきもし人の死るを
なげきのあまらバ何ゆゑなるべきたと滑稽をお
べくる人ハ四十よたらで死むこそめでたけれ
死さと兼好(ケンコウ)もいつれ命長きハ恥多しとも
いひくとよろしく人の長く生るをを厭るハ
凡人者のさまなり後句又斎ぬのつけ
合よしく俳乃翁の人を痛られ極なりけれ
不よその人死ぞハ人のといへる面白ならバ
釋教(シャクキョウ)述懐(ジュッカイ)乃たぐひをとこそ思ひよるべきを
秋風やとハたまる無情むきて付合も社理

あらぞ賑はへる人の身風に吹おとされく
かい足に浮時かく見へるよしれぞくりころ
さはりすもはらんに不忠(フカニ)義(ギ)なれどく
ことはさハぞ
十六夜を杉なりど名に浮かりけり
おもてろをかくさで偸盗の秋
昔ハ名月の秋も十六夜もまかりゆくく同
じ名にあらねどゆくく月を見しといふすゑ
後日ハ商人のならハをふ利欲むさぼる心を
かくして偸盗もさすこゆれどなほはらじ心

はる偸盗の杉のかえさころをかくしてくれば
とつねれ偸盗となりくみるといふまてろな
らむらはるもいまでおくやるならねば身に試み
ちのたりをふとふべしとまれかくまれその名
不ふくものなど盗人と見へるかしし
蜘(ク)ふり掃ふともの杉賑
五月まで小袖のわたもぬきはへぞ
はきよりなかるほどや
盃なさくらふ虫泥え巻く
年なひとり日待つてむ秋

いかなる附句ならむはかりがたし

波ハかさてみの富士を動かさせ

宮嶋く汐干ながられいかゞ艤

おの句波ハ富士のうつりくかさてある影のうご
くといふ句後句汐干見の宮ふいかゞ艤をさて
ゆる消えの家

城北の初雪ふれく 蕉ぬぎく

たきく火を吹く 鐘つくさゞ妻

おの句ハ家ふかつめくと蕉をぬげバ城北の初
雪ふれしと之後句ハ城えのいしきとし　暁

れさてごくをてうしくいひのべたり

黒木ふさて居る谷かげの小屋

後が娘と身をやすらむおも思ひ

赤多ゟくもいかならむ後妻となりて身を
やまうとむなど相思ひぬる谷かげの小屋れ
緑まさき影ハ黒木とゝもふふさがり居ら
むをしかりぬ居さ娘とら

水のいハやふ備 さゞみく

赤るまさて詠(スハ)游(カ)の涌(ワキ)添(ニユ)れ娘らへり
るの海ゝりれりしさ

聟入ふ薬嚢もおのが名をおもて
京に古風乃残る更紗
薬嚢が聟入ふおのが名をおもるゝを更紗
のまぶりと見えるげよもみちのくわくりまぞ
古風の恵八何るべき
卉もをうしろぐ一倭文の子
此里ふもちつゝへたる布襷
まてしたゆ会なれどをうしさ白えもちつゝ
へたる布襷八むかし何がし太郎が昆て参な
らむ

おふしハ塩屋まぐく末原おもらひ
乱よりのちハしらぬ皇居
此浦ふ名高き比ゝ気んまくいうのも由恵ふ何る人
の溶ぶれるならむとハ見ゆれどたゞいつわり
ねじくく世をもて何そびゐるなれバ衣をとふ
べくも何らだおしく八塩屋まぐくも来ておも
らふをとこ條句まく八かのをとこれものかくれ
まるなさけバ古さゝのどもよく見えてかゝる
めれど乱よりも條八皇居ちもしらなどいふに
はてこそ去れふものおもらひなれとつけさ

はものなりけりいつの代乃乱のくちぞ
雪乃ふきてまをはくる春風
古の名は上を浮世ふ手とりて
高臥雲根の隠士ゟ辞しがくし
え結のふつれくかゝる衣つづき
人の情をほそく小柴く
こも又さとりがくし
陀袋はさ木曽の橡の実
月の宿白亭主はりづき指出よ
右句陀袋ハ頭陀袋なり陀袋といふて

といはれ奈きるなれど頭陀の頭を思ひし
く陀袋ともつらひ来けりかゝるゆゑなきさ
すりこのむすよハ頭らぬ白衣ハ行脚乃
身の上ふて頭陀袋の中より木曽の橡れ
實をとり出をはしまえ俳句お意なし
唐人の志れぬ云参ふゝなづきて
志ばらく俗耳多をかする僧
黄檗派などの僧乃子ゐ一向く志ばらく
還俗したるが唐音をよくしめくはなに
流はきと唐人などの来きる時ふ出はひたると

いふ附合なりむかはさくれのれが蹝(ミヒ)鞢(ドキ)よや
赤きかしらをなづる春柳
花さけり靜(ミヅカ)が葬ぬかくみゑて
前句のこゝろハ里の子乃赤がしらを青柳の
撫るといふ句なれど後句にてハ赤きかしらハ
幾のきがるふとりなしかくつけるものと
見ゆ靜か葬ならバよしの花か盛定乃
花か
塩つけく餅くふ木どの草枕
なでしこのは草乃引ちぎ

前句ハ家ふ在れバ笥(ケ)ふもる飯を旅ゆしあれバ椎ふ
の葉ふもるといへる本のこゝろなふくみて餅ふ
塩つけくふ木どの旅といふこゝろをうけてな
ほ旅のうきさまをいひつゞけたり
やりし垣なふ咲る撫子
田町の蒲團に君か丸く寐て
前句を恋のよび出しと見て恋なつけたるさま
ルも公羽乃係の恋句なれバきもつけてまでくよ
た句なり田町乃蒲團の上ふそつこれく寐
たるさぐゝえもいりぬ艶なるべし比てハ前句

の梅子にたとへたるところ
花なる乃宗と見えたるちまの下
細き井凄をのがるる錦
さきえたる倚て乃春色
のこしたからさて伊丹洪白
琉球小野郎ダイこの素がへ
産千伴丹諸白の香もをさへてのこし
たらきるハ必定宗と白てく産なく
の素がへするさ夜をつけて
見しられて此付たり　本省の高士

嫁入さするより大や明子引
本省の高士に見しられて人位嫁入さするによ
星明子引術なするべしきそく附合か
くのめくよく茶白の位を定むべし
草赤ま石石えれハ河が海へ
どころ小夏には東京の坊方
さぐ茶白の人がらなるべし白気ハ辨ぞ
都にあばき
干おつきやる精金の紙
技のまぎれくろれをいひつのり

前句つねの不案なれど條句おのれが雜色善悪
らん干拍つけるハ、これ者にハ拘らん駑駘屋
なんどの鮓と見て、つける之得てハ手拭まゆふ
屋の風名よりまぎれるをいひつのるなま
若者どもの旅連なるべし
鑾鑁干を揚を戈鳥のえなれぬ
偏
笠狂斤 入るハ 何ゆえ
翁の句なれど作のよれ様不案し
のまおす 糸乃かつる 芋綱
縁の子が待恵智ふ 秋乃風

くどりれど公翁の意味句かへしぐくまめでたしま
さとふつくしく斎ならげるなふしのくおす猿
といふ若句に往ら恵の句を思ひつらむされど縁
の子といふて物不よくかなふひとり
手作りの酒乃辛くも付ふる里
目ざらし背と見ぬ驚馬の市
古調之餘筆
秋衣を旅のぬしにおくれて
家をさしるふ名残君ハ走らんや
若句たゞ人ならぬ人の思べるるはめて

ゐなからさりにかくれゐると見てつけたる
こゝろなるべけれバ旅の身は雅言を
うちわすれわが在さきたる名は左右にまぎるゝとぞ
やらひし君は去らぎてやとはるにけて八低
がし君の出られまされがくみ地し　まされまさど
からふけまえかくまでぶとくまぎてとまやさぬ
たきを且愧且笑(カツハヂカツワラフ)

流れ平　たつる　魚　水の札
戸に書れ　箸なるらん　蓮の内
ふ浄水(フジャウスイ)をいむ八盃にてまはらむとかく

つけるなり

子規(ホトヽギス)痩てや高ふはつらむ
わが思ひ浮世　一人

思ひきる君は斯一人らと思へるは女へての
人の情なりし寿みも斯のまの思ふとれ
わくよあり意白は斯一人情をつくりけれ
ば意白ふならむと見るべし俳ごゝろ
とぎれの痩てなくといふ事を意ふたとへて
しなり
此(サイ)恵をいはむとされば吃(ドモリ)まゝく

うちおくかへる中の戸は顔
意を以てむとされバ咲なりとハたとへ紀
白なる秋やさしくうちはかりたる所の意
とをはたちらきぬえたゞは屋にふれて
かへはとらふをりしこを借くり
火をたけバ谷の洞にもゑこまり
亜も羊なか　猪き　此　乳
はめのまゝえ
おふのをたる草の　秋あれ
入るて住まりよしめて　花れ奥

お白ゆくにも吉凶なる所と見えくよしのとハ
つけるなうめ強白のところハ中りくふ人里
近くなりふりり住まわるに山の奥を尋ねて
といへる弄のこころなり
瓢(ヒョウ)簞(タム)の大きなる石だうりたる皇
風にふられて　猶すれ市人
何ゆりも長(チャウ)安(アン)ハ是名(ミャウ)利(リ)の地
去るだうりも入るべき瓢簞を市の慶
おと見かつ瓢に風にふかるくとはしらひ
たるゆゑのちの白ハたゞ市人といふよりも

安の市を思ひよそたり是安ハからくにの
みやこなりいづくもはれ都の繁華にて
此地ハ人情軽薄にして名利のみなるの
ミなけしはもの之是安の繁華詩にわれをく
見ゆ
醤のれんに托こゝろ目ぐるなりけれ
いろじと味をのゐふたち出て
おのれも醤を業とさはものゝらまことに
醤乃れんにたところ目ぐるなりけれいそうと
味をのゐにたち出はむべく

ひとり世ハやく　すの　緒え
此里に古き家乃名をつたへ
里もなどいへるものくむかしより代々同じ名
をつけるなり世にまれなくはするのなり里にてハ
人にまたられたれバおのの顔にすのるのまま
でまかせハやくとの俗どころかや
足袋たびをぬ　西乃はけがの
きぬぐくやはまりながそくはてやらに
西のはりがれも足袋たびをぬでいふ事を見ぶて
かへる人と見えてきぬぐくとつける斎くおく

かゞそくほてゐらならむハわりなるべし

風ひきぬふ萃のうつくし

手まつらせで豆の汁猪をそべり来ぬ

風ひきて床まきまぬなるべしとかゝきて

ぐふろのゑりをつけたる一對之

おいろくれたる船波なりけり

月と花詠らの高船をわすらく

あれもその不之

彼れ六の行寺付る 春の末

見をハ涼しき 妻の 枕もとり

彼れ六といふを農家のはまきしもくつけなは

なま里おふふりたころなし

家なくて勝（フリ）紗（サ）ふつむ十寸鏡（マスカガミ）

もの思ひゐる 妻子のおいひ

きゆめくいろなる伴ぞろといふすハなけ

まどおぶろけまくゆかしき白之十寸鏡の

家なたハ妻子のお思ひなるべし

人ちらくいまぞれ座の白ひゐる

初瀬ふちまる 堂乃 斤 偶

これハ二句ともに源氏物語の面影なり

ほとゝぎす巣の何かゝる森中に

姐
種のけしげ　露ハこゑがはるく

こまちもかのるわひびたまてたゝまいづら
をつけゝりとみえぬがみなくよくつきてえ
まいりだれかゝし巣の何かゝる森中ハ故もい
たくふけてほとゝぎすもなくらむ姐のけ
げの露もちらむ

何やにくふわづらふ妹が夕なが
あの姐ハたが泪つむ　ぞ

何やらしハ何をにくるてにくめるところなれで

さ句などすくハふくめるこゝろよハはらんだゆゝし
はしきさげにをいへりこの何やにくの女ハかれ
けらた人な思ひ給ひくなげぬ意なるすな
きりて思ひきるすならだやうを見てくハ
かなしき山を見てハなげくなるべしさてへて
お思ふ人ハ夕ながめさするものゝ格句やうに
泪なつてむといふはれましろたはえつけでろ
ここぞよろの人なつけるなり

卯月のうハ乃ごすこく消さるに

姑も
きよしく鞍に居ねぶり

はつみ句ぬ之深く趣味あるべし消けしにと
いつるに居ねぶりとひびらきたるなんぞのぬ
をいハむとさほに口吃しくいつりほさかん
秋の田をからきぬそうすのちりて
け
いくなぶら文字ゆ子ある
おお句地堤田地などのそうすゑいづれもみな
農家の者どもなれバみなしらぬものが
ちなるにおよくしりたる人にさいしゆに
なるは文之須状聖法などの文字になるべし
いろ々しく尾張の本業屋

駄
そうさてる子の痩てかひなきた
本業屋の子乃病がちなるといふなり　みの附
合なり人情世態をつくしたりといふべし　本業
屋なれバ人参も熊膽も自由なるべきをと
うし純を子の痩をとりふとふところ故かに
ふくのめ
花のれ溢義まぬりも疑ひし
ゆ
ふしをくつく　腥き口
深きところある附合之渡義まねりのゝら
やりのしといふ人ハなかとふ後と義まねりなる

人にはらんたゞ花よつけ霞につけくらし
はゆく人あれバきとより仕んはるべくも侍ら
ざれバ何かしらひて口ハ理ならべしられ
いとも河を諸家にまみりといふ蕉句を付て来
しく何かしとつけて侯ハ俳の翁ハ人の格を
はこ

何ごとも無てのうちハ志づかなり
里見えそめて午の貝ふく
人のよくしる句なれバ併きん
芙蓉の花ればらくとちれ

吸物ハ先出かゝれし　きんせむき
お句 芙蓉の花乃ちる庭ハ多見客まてハ河
らじと吸物乃向上なるるをつけりはし
せむるハ西国の名産海若此名なり
はし木つきたれ月の秋　殿
芙蓉なら花に並ぶる手水鉢
おもえなし
火ともし付ければのびは峯のき
ほとゝぎすみな帰　仕舞より
俳林逸書趣

輦をかりく　車引らむ
うき人が枳(キ)穀(コク)垣(ガキ)よりくぐらさむ
古きのかゝりは附なりかねて見目は見ゆべき
よしを静り重く思ひ車にうちのりひろ
うふろの所へゆくになる車の主は恐げには
儀の家へ引かくし我くるこなくもろともし
りて出むろへたれどとまれ見づは身なれば男
をいるべき所なくていそぎせむと思ひわづらひて
枳穀垣より入れたるは垣は外の垣とも
紫の垣ともききをききたくぐりがてき枳

穀垣をくぐらさむとはみしく意の世つなるは情を之
たりかつへうき人といふよくひびきくめ
まことにしく公の意白につりては付らは
人意のならぶべき所にはらきそなるむべしはふぐ
なし

瀲(コ)

まき天にみる月の影ぼらけ
水(スイ)の秋乃比られ納言
はどろは附合になめてはまことに正風乃
まい面目を写られたる時なれば緋きるを
れそれにはりおの句もちてみきてぐれさる句に

て一句つゞきてめでたき天といふよな
文字ありといふちからがはかりてつよき調子
をうけて瀬水の秋とつけるあはれを句のひ
つりといふ句意ハ瀬水の秋ハ比らんの名おもは
せとせぶるを座ハをくるなげのをしぶとの意あ
るやくえれて瀬上ふ有船の月乃かげをもて
らバ比らんの船れふくらむ画中し

押

布子(ヌノコ)　着習ふ　風のゆふぐれ

合して　離てハ又とつかり　枕

布子　給のおもくつくなたところ風など吹てゆふ
ぐれのさびしさきれよ比丘人連の旅あるあさへ
しいまだゆふぐれなるらバ枕もつくれ離てハ起あさ
てハ離るゝわびしさ旅之中のことも布子着習ふ
れの何らひぬといふもあるらし

又わすむらふ蛙あハゞ床　ゆふまぐれ

蕗(フキ)の芽(メ)とりにより行灯(アンド)ゆりけさて

前句を女の言葉と見てつけたり行灯と
なしてふ蕗乃芽とりに出たるが蛙をおそれて
行灯ゆりけしたるけはひあるべしされど
それハ座にころよさあはれ事よ説てとくべ

たるりよハ河よりはじまれどたりけれバいかのこと

能登の七尾の冬ハ住うき

魚の骨しはぶるまでの老を見て

これも翁のこゝろよ名高き付合なり前句
ハよき句之能登の七尾乃冬ハいかにも住うかり
らむこゝろに法乃果まして雪も高くなれ
もふくらむされど小海まで魚の多き所な
れバかくつけたり意味こまかなりいふ詞
老後とも此句の姿をつくしてあるハなれば
筆をくだしかたく

立かけし屏風をたゝむ女子ども

河原ハ昨の簀子(スノコ)僅しに
河原のかこひふ屏風まわしたるを女子ど
ものとりつきてたゝみたるさまを見たる
付合なり

僧やゝ寒く寺にかへるか

猿(サル)引(ヒキ)の猿と世を経る秋の月

これハたがひよしたる付合なり僧も寺に帰り
猿引も家に帰る之一句甚高佩感慨(カンガイ)侍り
あり

五六本生木つけたる灑(ミツソヽギ)
口上此ハふとよめざれ見下この左
為(ウ)合(ゴ)のけしきとしゆ
でつちが菘に水そゝぎけり
六ト様子も芭蕉がこひの裏屋哉
お句ハ此が句にてちぢめ蕭こそぎけりと
いふ句なりしを蕭の一字をきへたやと
公羽よりたづねけるに答むるハ何らざれども古は
ドたるすよハ何らぞといひれけるによりて蕭
を水にかへたりと云去来抄に見えたりつ

け合ハたゞ句の相不なり
さみしくと藁(ワラ)鼓を作る月夜かな
螢(ホタル)をふるひに起し秋
是ハも岩暮た附句にて信(シン)子西風何諸乃
句的(テキ)なり此句ハところしく藁鼓をつくりたる
時よりちの何るじ此螢をふるひに起ろく藁鼓
つく男とうちかゝる内まし秋の二字甚ち
くら見ゆ
ゆがみし蓋(フタ)のはりぬ半(ハム)櫃(ビツ)
[illegible]庵に志ばらく居てハうちやぶり

内の道具乃或ハゆかた或ハ盞の外ハぬる真し
は乃やしきいろいろも隠逸の人と見て其まゝ庵に
を作つれバ其のいふかしこれ庵を立げしで
ぬけ出るまことの風雅なるべし此句を翁
の名残りき俳合なり
はまじく小ぐゝりたる底意をして
浮世の星ハことな小町なる里
おもハきをたしいたゞ人のはまじく小底したる之
俳句始じて観想の情をうつし小町の星を
いひしくなれ歓楽極りて哀情多しお作

いくばく時ぞ老をいかむといへるおもろく小町がす
はぶろなからぞとはめく もとはぶろなからねども
おもよへたび世の中にいひつきへたれ容ちる小町
などいひしくのちハ先ちよまぐなりけるす
をいふところ之
此翁常となれバ廣き梅翁
良のひらに乱言道する花の信
此句もまことに正風の妻の面目之俳ぞころハ
例ちじの翁ちるよ下総などの良けひらに乱
言道しきく例ぞに味まくる花の信とのふよて也

語たくふ松葉ふ春日の影しうかりたる日やう
きそまぐくも目出のめし名人の句をつくられ
ろろうふ写さそぐんべりうぞ

夕めしにかまさそぐくへバ風葉る
の口ぶよをかいて氣味よ記

蛭（ヒル）

前句いつもく夕めしよハかまさそぐくふ赤ふ
て夕方よりきそぶしくなほといふりをそらしく
いひたる之俳句農家と見て句ハ頭は田仕ま
子出ろく夕ぐれふ帰りろくかまさそぐらふとつけさ
ほ之蛭の口ぶよといふみて田仕ふりもどりいち
しほし

丞せいしたる殿よりの御状
金（キン）襴（ラン）褶（ツバ）と人ふ時うし方のやきたる

諸（シヨ）侯（コウ）の侍（サムライ）と見て金の髪（カミ）より唯と採せ
よと度々く仕着の赤ほたま之俳句たまに
入りの侍と見ていつも金襴の大小たしたれバ
金襴と黒（ヰ）名（ナウ）をつけられたる之侍ふれかく迄
ほすく

何をそるるよも無詮だりなり
花とちほう身ハ西（サイ）念（ネム）が衣見く

俳の観想乃躰之世の中ハ何を見ほしも露
むなしけり之何もかも無常乃やうなるものなれ
ものよくいふこころにありて西念とハつけたは
なりけり此句ハきこえるほまて之
何思ひ草　狼(オホカミ)乃なく
夕月秋野の萱枯れ枯れ御(ゴ)廟(ビヤウ)する
其ところ之
惜よりゆのきやたていさだよき
加茂の社ハよききやしろ之
洒落(シヤラク)の句之おゐ句をか茂の何かりれ鞋こみ

ての付合なり
面のやどり乃無常(ムジヤウ)迅速(ジムソク)
見眠る者がなるの身れたふとけよ
おゐ句無為迅速をいふより俳の観想をわた
しく世の中を何ともたちけさがむよりまて
駈れ何ごころもなくて見眠らむハたふと
かるべきなどの付ごころ
序偶ふ虫歯(ムシバ)かえて蓄るの日
二階の客ハたてれたる秋
付ごころ立入りりて客の札不在旨ふ

昼より宵のまゝふうちかゝめていそがしさに
お席の虫歯をいたみて片隅にかゞみ居ては
千いつの客らハ二階の客ハ皆たちて詠め
やりなりと此句之人情世態は公翁子何らんし
て涙を流らむ

稲の葉延のちゝらなき風

発心乃はじめる越る鈴鹿山

お句ハ何ごともなき句を引おこして
何のかゝといひし人の思ふ事はめてふハらふ
発心し先来国のかさを携りきむとてたゞ
めぐく鈴鹿山を越ゆる時との付合之

籾臼つく程松がまれば

發句 蓋る三巣狗に秋の来て
ほきまゝる何るゆじさや

入込に諏訪の涌湯の夕まぐれ

中にもせいの高き山ぶし
入の込の何の中よりひとり目だちてせいの高る
さゞ山ぶしならむハめばましかりぬべし

細さてぢくより立つのめつて
お思ふ多ふおくへとせつかるく

其句をへて意ハいづれなるまでよりつのり
て今きつるならひなれバ此句ハさてふ
落ひぢのつまりて山とも成めし意をのべ
て侍るまじくと打思ひめぐらし今ハ今も
何よりハとてもいきてとまるべくも侍らねな
ど思ひきづの際に措きえまりてきこむ
はふいりしてりきのうふきころの隔るべき人
ハこころなくへくむかしにきこむる侍るまかなし
うりぬ尾し
秋風の松をこハげ際浪の音

尾ゆくくや　白子　若松
との又後句ハ手紙よむ花の陰くわれ一句四
とゆふ句なるがれの此との三とをゆとをげきた
一句目よとぶまするす百日何まりなのれ白子
若松の名をふもゆきていせの国北案内にのし
りくはがつねよ此附句を思ひ出して そゞろ
古人の跡しりわしが今にみ此句をよめバかの
面を思ひ出てなつかし抱まくふくりことを出
そえつ句ハそこえたる流し之
順礼の死ぬる　尾の　俄出

何よりも鰈のうつぶ何れなる
ゐぐさに別れのたへかね死なんといかばかり何
れならむまことに草も木も泣ぬべし たゞ
鰈の何ごころもなく〳〵其死(ミ)骸(ガイ)の上を飛
まはるハ蝶にハ何らでうつくなるぞかなし何
れなるとのこゝろを下にふくみてたゞお
句にかくいはでなして付たる句之あはれ
らを句のえこびとりのはこびをしらざれバ
付合むつかし
羅(ウスモノ)に日をいとハるゝ 俵かくち

然ば見たきと 泣たまひけり
何りのまくなれどもいもし さ付句之
酒で飛たまれ 何さまなるらむ
双六の目をのぞくまで蓄うけり
おも敵も壹も飲ぶして 双六にふけりぬる
男にても何らむとての付合之世に何べき
此まの人なりをうし 記付合なりけ望
中〳〵に太宰に居れバ蚤もなし
わが名ハ里乃疵ぶりもの之
我のれが才をかくしもつくり何かふなりて

世を愚弄きれ人と見てつけたる之
月枝くに似たる月
花落て何まり咲ねけバこら枯て
前句まことにたよときし句之たゞつくろいぞ
いひ出たるめさむるだろりくのきし句之かくるよき
句よりハよのわどきゞ似たる句にはらされバつけた
るかひなきさ越條句も又一きハ手がらはりて
花落ハ何まりまねくゆゑにうら枯るといへ
れ新趣つゆも前句にれうらだめでたき附
合といふべし附てみハきこえたるなりし之

一貫の誹むつうしと爲し豊
醫若乃葉ハ飲むに苦
漢の趙因が疾で藥を除るハ巾醫を徐きり
といへるかへさそじくもよきに苦なるべしかくる
高趣の人一貫の誹ハむつうしからむ
けが徐くらも證誰うち来る
山伏を斬くかけたる罪の苦
前句のやさしれ世の中みじれがりし花時ぞと
見てつけたるなり句をつくらバかくの如
く何くまでもつゞるべし安宅といふ謡の

中に山伏を斬たりといふ事は何ゆゑの付
も有るべし
無に拍ぐ和尚ハ是に有る所
たゞくしめて有る人の大日
はきるゝ気なし
蓮葉に鯨さげゆく
ふ断たつ池鯉鮒の宿ハ木綿市
絆に及げれ
相國寺牡丹の花乃盛にて
椀の蓋とは蕗に小の子

おほさの牡丹見にれしならびてかのく
僧にむかひはなく椀の子ととれバ蕗に小の
子みるく斎藤なる料理なりとの附合之
むこのし 咄に 野郎 泣きは
ぬぐくハ宵の 踊の 伯泊を出て
おもいろなる むすしがるりをして野郎
を泣きとれむたる生はしられ後白ハ野郎
哭の何ふれ共どもが宵ハ踊ふらち京あゆみ、
いろく乃なあみなりてたハむれたるまゝに許
つぶれ何のぶのくさぬぐくのも其ハさそぐまて

ゆかしからむ
牽牛の挑灯(テウチン)ともさて給はりし
汐わたしける星川の橋
或白ハ嘘とハ、者をたちし牽牛ニ挑灯つけ
てゆるしく俯てろハ女人までる星川の
橋ニかゝりし敗も成えなれたきバ挑灯け
さて星川ハ汐わたり織れるしきつと吹
あるとの時分を何ハをたるゝ
塚のわらび乃萌(モエ)る石原
虚(コ)無僧(ムソウ)の師ニめぐりける春の末

ほきころわるがやゝるゝきさこえ又ハわさるゝ
なたがやゝるもきさゆるまれゝくまれ絆し
がゝし
胡むニ灑わたりたる藍(アヰ)の芯
よおれし綱ニかゝれ蛍の粉
藍の花ハわくりろわを在所ハわまして
きゝ乱き足ねニ麦の粉乃ゝほまぐさつ
くさわとりふべし
月散ニ髪を洗ふ 揉(モミ)出し
火ともしく坊何てがふ子供たち

これもたゞ村居のさびしく

今をやは鞋羽織(ハヲリ)を着連立

春行の鑓(ヤリ)に往もかくまし

お白ハ侍の子乃美者どもが同じ草羽織を着

つれて酒肆(シユシ)章臺(シヤウタイ)などへゆくを見てむかふ

よりも春行の鑓見ゆるに見つけられじと

かくれてはまれ附合之是亦人情世態

日ハ赤くなれば　二月初日

初花に伊勢の鮑(アハビ)のとれ初く

お白を伊勢の流しまたるもてもめでたし

初花の頃より鮑とれそむるとや

みどりはさて六田の柳わり桂て

筐菜春めく和太豆の汁

艾色の料理饂掛(ミヨリ)節くべし

児小まゝはく綴(ミヤ)拡(カロ)堂(ドウ)の着

咲そめて丑ぶたよりも揺さそべり

お白ハ日枝横川などいつはの児に丑ぶ男

なり塩白ハたゞあかひひぞきまではくる何

とつよだらのさくろもなしや

えゝ麸(キバ)まゝはつおの坂

住居をつけたるに
袴もとらではやいりけれバ星
一るの音僕輩たちのとかしふ
あれバまろくの侍などの君命をかゝむり
て、侍輩とゝもふ旅ふ打もむし附るの左右
ぢふ親族などか行る人行かてその父ハ人
よりよくたちゝく久しぶりまるく其人を君
ねにけれとかゝり出てともふ思ひなのぶる者
もなくえや門おふーるのきゝゝえ侍輩どもの
いはとせりたつるはゝまゝらふ袴もとらぶく

波影のおもてくらぶ宵の月
かゝはるまじく翁ハ見つけゝりや
はし汐の門乃柱ふおもく
空を仰ぎけれバ空に入虹
二白川ばらの家之汐ハ門の柱ふうちよせ虹
ハ空ふうつるかゝる住居ころをやしけれ
鶴阪の雲なき空にあやれて
ものふうちれ輝のくまなしした
お台あまなた空ハ左右の方やげなる空
と見ておくふ行きり仰のたゝへしき

かねなくわらはぐとの附合なるべし

庭しきれバ雨下にぬるゝ花の笠

羽織そろへて春の気色

若者ばらが気色にえならず出立たるなめ

されバ庭の髭(ひげ)もなく(よりとも)たゞあはれゆくさまゝ

首の座とれ 親類の露

初雪に先下の句を出しけり

上の句を狂あれ下の句と見させてかくハつけれ

は親類の露にれつけて殺されし

何れバ乃

森は体も訓れバ安危洗のちる

風雅仕よし 酒のこれ才子

おい流の体にゆふ家まちてたゞめハこゝろさて

まづく流のちるれいふぜうかしも訓きバ悼く安

危ものなりといふ句を詩人の体まゝ見て酒

のこれ才子と滑稽にいひなるやふく縁

さてはるり何さりに

僧の髭(ひげ)剃(そつ)は魚のゆふぐれ

女らほ花のまめくなりと踏出て

さゝなへし 出かく座理気きといつ座ゝ連歌

の歌乃こゝろも有りやをみなへしハ女なれと
へたるいはくしたもの形りと踏おとさばよきさ
僧乃若者ハ心なるべしけて附合ハ無理に
をみなへしと時それを何ハせ発句ほとりと云ふ
なまめくとほかりをたるり
月見おりし旅のね覚
けまぐに見捨ふる布代ん
迎さかりの月見なれどわけと旅のね覚
にてりし之けれバ其枝の僕づさひなけま
くの見捨ひしなるらむ

豆腐句ひくき所へきらぬ里の花
鳥の巣ありて住けらき庵
此句豆腐さへなき花之旅句ある巣あり
りとなりて何れなる庵にすむ人清閑ら
らやむべきの地
けどろ宗匠身をも惑れたる
久まくたのむたよりの読麻ん
何れなる附句まろみどりたる二句の間に
ものがゝりもつくばへらなりむかし翁波
ふるしき女何り又まハれぬれひとりの母

はやるひがちなればふたゝびならへおもむく
て秋夕の雁もかへりたえずなるよかの世ハ
とかなしうおぼえてこゝろみえたえぞやは
りんむきさわらりのをれとをたのみくみをそ
まむとおもはさんなふきの難波ふて八又母の
わすれてふせなれバとつひふ宮の津ふハらうれ
たるなりけれど母のすみてころよかりてつ
ゆもえわきそれでもの思ひきてぐさた何かれはま
ましで母ふたよりさりせバやと秋な夕なふ干
思ひとゞはれどけるべきたつきもなくてこゝろ

ならべ日をおくるはふたまく猿麿の子ふハな
ふハろこしの昔なりとふふくれけふかぎれ
なくてたまぐくとみかたつけく猿麿へ干
たのみておくりたるほどそまハたゞゆんわたふ
たゞたかふれるなれどまれはまむ人のねむり
をけまそのこえ
世捨人干ほどこれ棄(ヨステビト)つ
田をうて俺しうもなた
世捨人世を離れて能さてものを定遁
の僧はえらもゑらしからべ田地などを捨て

人にくらをみづからも田草などとりてたの
しめは人にとりなしたる附合之
赤裸に蚊やりを焚る紙帳
よるもかじけてひともとのまゝ
前句うちつどひて疫病神を送るさま之
後句なれバ疫病も大やけ農作もならぬ
まみて妻もかじけたる之
只いろ／＼と背中にては
赤取りいられぬ人を思ひうね
前句只いろ／＼と背中にては人を疾がち

なは人と見て恵のもれ思ひしなれ何方か
もちてゐふ不足なきたる者なれともうち取ていられ
ぬ人ハやごとなきかさ城思ふならむとの付
合なり
ゆふまぐれ煙管れとしらく立ゐり
泥うちかゝりて来て女のぬれ
前句ハゆふぐれまぎれ煙管れとしらく疾りし
不ハ細元と見て来て女のたりふれをつける
なり
窓の八鳴にまはひて

傍輿ハ花より月の ゆふぐれ

此句の八嶋ふさぐふみちのくとつけて一句ハきこえたるまでなれど月ハひとつ花ハゆまぐなるをいひかへたる新しさえ

麻 摸やハ雀ぶと家ふ新出して

疹しくいは花のやまぶよ

疱瘡麻疹などまする子ハわるく人いとまるなに家より新出してわやたをきくとの附合ならむられうらくハらぶちきてだたるや

白畠の中ふ 落る 稲妻

嵝井ふ 能退 落まて 夕月 秋

これらハ句の調子をよくしハを附る附合なれ畠の中ふ稲妻ハ落る能ハ井ふ退落まか柏子を心ねべし

ほとゝぎす落て 鳴て 扇つかひめ

煙の中ふ ねろ さて 手 桶

此つけ合俗の心附人を殺るきり落て鳴といふひただふ無者物根つけるえ煙の中にとハなじめよ人を捕てまづ煙のたえぬうち手又外の人取やく手桶をもてまゐる也

秋むはじき世の中ぐらゐもはしくぎんの年
くらむ人職などのはくりはしぎん
此をたに不のはるものえりくなくぎんを
花出のたをらとひふる河水バそのころ暮き
にしも
梓(アヅサ)弓(ユミ)矢の羽乃音羽をかぞへて
馭
驚をよ免き読 暁の暮年
梓弓ひくまなどはのく来りけれど弓矢と
つぎたる俗へはりやなしやよしなく
とも俳諧にハ戦など立てりえ世の白軍揚と

見るく高氏(タカウジ)義貞(ヨシサダ)などいふ大将の軍れ出でられた
先祖社に詣て思ひ敵退治(テキタイヂ)の願出立とよの為なれ
また暁の一字大にちららはめ心執つくべし
花の櫓をきそる芦枯くら枯
梅に出さく初風や芦ぼうハ花の体
きとえら俗まくの旅維之
まぐ鞋をいとりる家のうつくしく
かくえし琴の捻や私まくた
二七いふ人琴を揺(ヨウ)さるら
麻の暮たこえく名はきぬ家

冠哉も落きてだんくよ　泣しあれ
面白き床の書たえくよめハ際もなく謎しき
ことなるべし　ただ秋よりハ様ハとつや白きなれど
様白きてハゆゑ何もく際きぬことゝ見へしや
おとなたる人の気みだして泣しあそよしきを
つけさり何の思ひをいふるハなかれどたどろ
の麺をおがめりしたるこ
見もられ業種ハ外くけしの茎
楽を悲くく道させ納戸の学覧
なのミなし

硯　法度と　並や　せり哉く
叙の身の寶此方ふくなぐ作まむ
面白硯何れハ艶書（エンジョ）なども　かくと硯も筆もいさき
よきなるべし　様白からは　おがくた蒙かれくなぐ
作むかくもなく謎し　たゞ硯の面ハへふりろく
いとゞせむさぞべなかれハせめしくハ宝の方にて
面をまくしてなめともなく作まむをも之おもひに
人の業性（ゴウジヤウ）公羽ひとりあれをしる
商とふ水哉　何げる納戸（ハコドヒ）極
山鳥のわくふし　尻ハ之づくなり

お白は戸棚つくりて高みより水をおとしければ
はま山なる山寺の庭を見て山なるばつけたる
ならし一句作となくければよ発句之
見えぬふりの主人に連をもらはれりめ
きてがく　半分　かくきて　傘
お白くちくの言れども人しらんば拾めなれ
つけを主人ハしるめなりら　しらぬが介すして見
きごん之條白ハきてで見つけられしく傘干
きてがくをかくしたる　なりめ
自然なる者下くれば里

老たるハ笊簀よりおかにかしこ侍り
お白ぶりよりめ下くのてのなりしどかくこそのび
たる人ハたゞ人ならんと見て付将して付た
まる俳の掛之付ぞろハゆ恵初めて下くの熱
人の赤子なども川つれてやどとなさかてよきのゝ
か出くは小老人をバゆはかれしくかた笊屋のかま
でめしのぞきられてみことバなどたまりる時て
し乃子ハまことやらなりとおかきられしかまえ
えひく絆りバかくならむりまことハかまでも
句をよしくものよからん

松山の櫻ハ躑躅の咲かゝりめ
焙(ホイ)炉(ロ)乃炭を下す川舟

松山の櫻川ニ木曽躑躅の咲かゝる中を
焙炉の炭をつミて下す舟之春色まさに
画裏ニ入焙炉の炭とハ画家も及ばし
ふさてぞ擬(なぞら)く洗ニ使ま
亀之ニ車のおくろを持をバや
此付句ハ公羽乃名句中ニ古ゟ人口ニ膾炙(クハイシヤ)
きれバとくても及ばねど古かいり共句ニ此は
擬く使まを洗ふ人ハまことの名人よハ行ら

ぞたゞ浮世のすにくとしおもひ姫のをて月は
きを送ゆとめしはめなさ人と見てつけたる
なかめつけどころハ老ばらくれさて一句のこころ
ふうぞバ人意の及ぶ所よならぞ

目のさめに先え子みハしてやめて
きゆる　ばかりめに　纏(マツ)れきゆる

目ニ童朦(チヤウドウ)何ぶ人ハ大抵となるの鬱(ウツ)なりと
うや人をおさるニも脈を第一とすとぞされど
古句ハかゝるむつかしき事を思ひてつくりた
は句ニハあらんたゞ諺(コトワザ)よりふめは目のうちよお

よみかものハ何るといふてろ之條句ハろの人
馬ふのりて何もさゆるぞうりふまるゝ所
いかましきそがるゝかゝる人なればこそ目の
ちめふよみハしてやすらめいとなりし
形紐の出山乃春霞たつ
ミりじめさそぐめえてほむまことども
おお白早春のけしきよて世の中ハ春になれ
けれども形紐の出山ハ雪いと白く所ら春の
きがくもなしといふ句を取りじめふ見やかさ
ほかおとしたる付合なりや

草臥伏見ふ地雪踏重ね 秋の暮れ
伏見何くわの古手屋北月
草臥伏見ふ雪踏川きめてゆく人ハ伏見何く
ゆの古手屋北門ともさしまたハきぐみその古
手屋が雪踏を担てゆくともさゝ出いづれ急ど
なるらむ月といふ所までのさてろなし古人を
おげとふ月といふ行しの秋といふもなのよく
の月といふも同じところえりしとのひてなて
秋とも月とも成ぬべし
月すれしてはなしもとの姿見

くさぞやしに書ても子ある筆の語
若句思ひきりていつもしるの文章見えも作ハ其
にりせむとてうちやりたれはまたあめなれハ
そなくも思ふいりはよしのふみをかくはさ此
ぐよ筆のふるりはしとい付合とうそやうよ
といつはハ一句のみよてふりさとてろなし
弓と矢も得ざいといけ子鉄まづさ
句
経なはし出さて箙の作ハせめ
作りしなは付句たのめまでをさなたん人の作
前ふめされて弓射るにその親乃心なとんでれ

赤子の前いりで泣かむと箙の作ハせめより
はしのぞれて案じるやうさそふつけるを発
といふ二字ふかく涙も落ぬべし
作 陸ふ菓もらひはしめいよく作
娘
をを遊ばし人不作ハをぬ
されハ炭俵の付合ふかくさとみ人のよく
わかえれは俳諧之若句の人がらハ軽き俳
と見く負見しく着しながら捨ちく娘
も給はなじく人ふも作ハをねやしよそすめて
ふぐつるとの付合之

なからん逢ひ同じつらなる盃基手（モトデ）
ちとしハ盃れ ふらぬ六月
其白ハちふ気盃逢ひちは商人の年久しく御
器量（久公）きれども元より基手あれバ出世も
せざれなし 親なる之 惟白ハたゞ久しくの交
逢ひといふ事ふつけまり其意なし
礼けるは 味噌兄みやは兩河岸
ひとといひ出して 此作者の事
此句につけたく人ふさし侍る事にあり 此其ふれ跡
へといふ事にありて又此作者といふ事いふ事ならむ

と公羽にれづねりるふ公羽のいハく此作者よりなる座よ記
す所らバかへよもしかへがくくハ此巻の見合御
ふしく於けといひけしよしそるむべし 所かくべ
公羽の俳諧をさげけは河海（久ハイ）の細流（サイリウ）を擇（エラ）ババ
といハむらけし会くめといひれむかりとまといひしなよ
とりふも俳諧の全会なり 此事をえらばる
ものハたゞ此会のされしめて俳諧の玄妙に
所らげる事をえらバ公羽のこの志とバを御心ふ
記まべし 俳名ハ子ろえたる庵之
好音（ヨモスガラ） 尾の精 扇をれさえけは

菎蒻（コムニヤク）むらり 読様 名月

名月ハ人々酒のさもの喰ひして夜もすがら月
をながめ侘ろびしかひとり茄の粕麻を押え
ねて月も見ざりしこの付合ならむや
或人ハ誰ふりけ下地なくて見ば
霧をおもに居合一ぬれ
或人ハとハ秋風すといふ所も同じところまで或
人にいのちさてろハなけれども人ハ旅人とよくき
聞けなければ秋風すといふハむずかしひでたよる
ならべしさべて句をつくらばにけんぬるき事なるべ

付合ハ人中の心にまかせて居合ぬさの所からら
居合ぬくといふ事の其跡をおもふといふ所其
まえ心ばかり見えらるなどものおかげりわ おこころし
おもくおもふ心をおもふ名人の手段なるべく
べし
町衣のつらぬきと　砕て花の佐
門ぐ押れて　壬生（ミブ）の念仏
ちちむに薫のいきれを吹返し
はじめの句ハ町衣の流れ立て花見よりて
つらぬきと砕たるといふを中の句まで八ツ三生

の念仏にまゐりたるとつけたる也格の句立合
詣じゝ糞桶荷ひゝくたゝけにゆくなまえ
これ附合の清鑑
　ゑめ香る傍に腕（カイナ）わづらふ
江戸の左右むかひの亭主見しられて
　前句傍なる人のごとく旅がちなる人はたまえ
　後句の人は江戸よりのぼりぬる人と見て
　旅行ればー夜左右の遠しきにむかひのある
　まれくばかりまでゆて妝などとしけ江戸乃
　掛かりきたるたまの附合なるべき

志ちみもいれどから臼哉糟（カス）
方くに十夜の内乃鐘のある
　京の小家住のほりかはなるべし
桐の木高く月さゆる之
門しめてだまつて寐る西ふけ
　庭の桐の木に月のかゆる宵をひとり居
　と見て門しめて宵から寐るゝはあろ安
　句をつけたり
ひらつかくらまで　まれがへさる
納七十に女房の釵子　掻乱く

貧者のたのしく生をひらひてよのくれたる事て
を哉り一女房の歌子に批ましなどして書き
わたらけげりたる体ほしきもまれも又人情の附
合なりけり

まづく此春もさて梅ぬ隠人

法師の風治を送る花ばかり

など何とかうすもなき附合なるべけれど何
やらむかしめかしたるの若句は中東肉かけて隠人
したる人の此春もはづさてすたし法師などの
世そよ有めてみるとの附合なるべし

どの家も来の方に窓を明け

奥にくひかしく濱の雑(ザウ)炊(スイ)

前句ハ浦邊の片がハ町すくどの家も来ぬの
窓を明けたる体之係句ハみやこわすれ人乃浦
邊に帰るしく雑炊すも奥をつけたるをく
ひろくえりめハめづらしとめでくひたれどもハく
ひ何たたるとれ附合なるり
よみる帰一段しに言しなりけり

まゝ盃の　真乃　異ぬ　雑用

前句ハけたゝく　優艶なるけしきなるを

後白川様じゃく世間のつねにとりなし　未足秋
母子の算用此時分をつもり
隣　へもしらせずで嫁が連て来て
屏風　のかげに見ゆる菓子盆
此二句に人情世態をつくさりとよぶべし其
位のものなどの隣へもしらせずこそりと嫁
をつれて来る之後白は家などはなやかす
にて料理などするを隣を其の人の何事
ならむとけしのぞけば屏風しまわしたるかげ
に菓子盆の見ゆるにて婚礼なるてなめし

よとけやくけ猶之公羽僊遊の身にてかくるす
はぐくをみつけれいれしはっぷりしたるさまをべて
俳諧は其一人情世態にわくらけれバ何りれなる
ましきしたるなしひ出侍すかし
僧
妹　をよい不らもらりた
哉のさと一先文哉やされ
これも又人情世態をつくさめさべく炭俵の俳
諧は世事なりををけしたりめ久しく縁に
もつらけりし妹が思ひの外によい不らもらられ
しきでふお説きかばまんれバ先そのけれに佐又坊

の僧都よくまきつがもとへよみかきくろのゑを
さしをたるよの附ごころなり

餘情　宗の声がれて　涼を見あり
汁わりいものすりよりて形めて

これも又路乃附合其里其句ハ大水の何とゝ見て
餘の沢山なるに餘汁たきく皆ちちくさし其まゝ
其里乃中平　座者此老人何りていはい者よめ
よくひしといふをしみえいでものげむ其に宗
の流れをこれを見にゆりむとつれさちゆくとのつけ
合なるべし

雪の辞吹えし　たは　繊月
ふとむ　丸げて　打思ひ為敷
其句は雪の降つてたはは春風の吹折れ
月の能しくとはしらは枝ハいとゞもの思ひし
からむといゞ旅人のこゝよひくべしやいられなど子
とむの上ふ雁もつらだにゆなく打思ふと付
たるり
えつち　はるを　と　へ　何がらせ
泣てすれひろふおまし　浩ぢふに
これも何と定めて侍すハなりさこどやゝさて

あはれげに付たる体之絶てとらバ泣子のひろふも
ましハ人のなくかゝれたるなるべけれどゆゑんあ
まうくまづハ人をも告げるかく体か今したわ
らハ此といふ人のなやみしてたつち坊主の念
仏さへたふとくおぼえてとへはづらせく的など
くハせたりといふ付合のや
冬の夜に雪のはつ花をけしきは

年貢(ネムガ)　済ぐと　ほめられけり

秋も豆角もはや　雪ふる頃は在の百姓
どもが年貢も済まし　雪の油へ大事もし　呆
て遊びけることの付合之なり　雪ハ豊年の
兆(きざし)といふ事をもふくみたり

堪忍(カムニム)　ならぬ　七夕の恋

名　月の夜に逢はせたき芋だんご

あまりものくよねたるすな　堪忍ならぬほどよね
といふ結語あり七夕の日和よねたといふ句
なり付句は照りて八芋の名月ハいふなう
むつかしく名月の夜に逢はせたきとの心
ころなり

睡(サウン)の　うへ　千年　さ鳴さへづる

花見ふと女子だらけが　連立く
大和路などのたびられ順拝よくはる之女子ども
りに雲雀のさへづる春のけしきた女子だらけが
賑はしくもちらし花見かけじめたゆくちぐさ之
妹　おもの餅なれやはらぬ秋の風
剣　本　乃　安　た　玉の露しも
二句の眉にかざりなき世継まくらふ餅つれ
なくらん餅をたやはぞくふて居る人を貞士
の勝者と見てはれど剣本の安芸玉まで信
よしともかりけれる之

かハ金の千葉　剣むもかハの元
馬に出ぬ日ハ内ぐ意志候
某句の位を見なるす　附合の常套文句
はれバ鎧乃かハ金の付け葉きざむハ句なの
轡（ウミツギ）などのさびらしして馬をくの支を附る
ものなり
扨ふ門石鉄　五十　石これ
嗚の餓鬼（ガキ）も手をさする月と花
小國などの五十石のかみだりなはやかさそ
て門がまへも札でつらかるなし玄関に

旅も刀をかざらせたれバなるべし然れバ俳句に
てハ修行の郷士などゝ見てハ当らで此修の孫児
畜生までもよく是をきゝすく様にあたはずとなり
月と花といふにつけてハなりけれど附てはいはる
ものにて一句の上にてハ月花の何れをはいつて
なれ思ひ外も住ならむとく一句の上にてはれとは
どころとさうさなるところをむすびてもとむ
べし

川越の常しれ水を何ぶなり
平地乃 年経し 萩垣

前句川越にわたれ本不常しまで水の流れを
何ぶなどの俳句はれど尻中に何るべき事之
俳出きて 鴨の苞ほどゝ之
尋用に浮世を立て 京住居
前句ハ為なりよめれ引来ものゝまことにめづ
らしと川ほどたれるハ少年君子浮世を立
ながらた京の住居なるべし ようハまぬかれ
る附合之
中よくて 傍客合の 借わらひ
壁をたてゝいく 森さぬ名月

前句どといふものハなきものなれどたとへバ江戸侍の
の長屋住なとゝ見て侍学者の奴僕なと
めハなしたる也なし。さるを我かわらひする
前付句ハその侍をおいて孫なしと次ぐ
めくさ法之

鶴の鳴子乃 縄をひかゆる

ちらほらと其の掛場の打戻め
籞（イケス）の鶴ふ鳴子なつけゝくる鳥をふせぐ之
かゝ付を鰹養の漢と見て其の掛場の打
うひきげさたまをつけたり

きのふらは知らて落る月のまゝ
狗（ゼム）脊（ベイ）かきゝ我衣なほ
お気なし

孫が添とは祖父の借銭

脇指ふかへしほじる 脇刀
前句を軽き侍の作まゝと見てつけたる之孫ふ
跡をつがもし借銭のかゝ付をも作きてなほ
べしけ句ハたゞ祖父の何と我孫がとなといふす
なれど借銭といふもく作借の老くし 祇とかる
なり後句刀脇指の手我つかまて侍の子孫

やゝすなはさうせかつほしげなとゆかしく絲の手
のなきなたなきゝらきこゆる附合之
笹乃葉に小路堤て松をしるた
ゆゝ侍りつなぎて門の出付
蒋白太も九も萩垣の家まで小路のいと狭け
きバ双方より笹の葉乃ちぐりゆひて小路の
海てらぬぬほどにな屋が松をしるといふを隠
者の住家と見てその小路乃家に隠者の住ゐ
杉が門のひくけれバゆゝ侍りつなぎて出付て通
ゆたまゆくまじく出る事なく侘住居なる

屋た
やれとす出きて京の道達
有明にねくなく花乃ちくほひて
京のがりれ屋きをやつて出しらくきで出
おこ玉乃けし九之段三月中ば成るべし
そ指ふ小峯（アゲ）の仲居ろハしくと
ぐらまとて乃晴まて
小峯仲居比そ指ふろハつくはい松よりゐは
ろつたて出ろもと奈た日和なゆしが思ひの
ほかふぐりらゆと晴てまてに成りたるをよろ

きつぶしいふ附合なり
槻の角乃太てぬ　貫穴
渋出しの牛に　俵をはこぶなり
そくらに何かはれりしたならむか
むれ〳〵来て粟も稗もむくの木
律
僧たし　許　予ふ　翁の　銀
附子をよく見つけたる附合なり　粟も稗も
むく鳥のむれて何かれ八山なら或ハ太ならと見
てそのまゝ乃上人此事よ翁ふのりて出席やす
見るべし

陰ぶさふ星乃　きぼれかきれ
引立てむりに錠きほたをやらん
米白美人の粧なるきゞとしてきこゆるぞ
陰ぬ舞の取しをつけたり何じ　大和の
古筝にめし出されく夕やらさへ朗詠せよ
ときくめらるれどもさよかり立出べくもあらぬ事
なれバ陰にむきびてこゝろひもはへぬを大和い
うれくなでゝすらからおふてかくハいなむ
詮うなほなれ門立て御ハせいのことのまゝ居に
わりなく立出るきゞしてろまあらぬりば

形きハめでたくこそ舞ふべくもあらねどもと
より名高き読み人なればあはれへたをやらず
すなはちかの清書は祇王にみせハせ秋野の静
に舞せて候事なり
盆仕舞一番で忝き候　結の奥
留麻の麻を忝しかねるなり
候の人情は附合なり
よくよく結の奥も一番で思ひのほかに盆仕舞
八留麻などして業にはたくさりがちなりしが
にてきにより思ひはたしく扇喜に誰出し

留麻もよくしらぬことを思ひてさころをあらた
むるとりふところを書しわたくりとりふことハふ
てきしたる野手候之
中国よりは　状の吉大
拾ねのねハどこへやら　ふるふ舞ひ
去れハめでたたんの分れとえたとへバ大坂あたり
の金もちれれところぐにふ候まりまくよさよ
わもかしこよりもよたるすのといひ来れる之
なかくわしくいつて去れハ代々の家宗にハ
あらでちろごろより候てと拾日のくばるらぬ

く出世したる人のうへも何事も人にもてなさ
れぬく又もや中玉よりの状もめでたきす
をつひきしたるなりかくとおきて付句の前
協たがひたれやしなれどすべて付句ハ前句に
しく見きてりけりきこゆれておくべし
気はたむだしかすみ気の江乃　桃　桃
山は門　何る　有明の月
桃桃の中に門だうり見ゆるハ寺にや何らむ
ミまよや何らむと月気に見へやりたるもの付
合なり

水際　ひら〱飛　濱のふいわし
見え通は紙三井ハ花此　咲て里
おえなし
出ち風の又西になり　ふふなり
わが手に　絲を　たより　がらはく
是れも名高き寄物の付合なり若句さち
風の西になりふふな所で乃よろづさへろもと
なきけしきなるに身の上をふくしる付人
ふくつがるの絲をとりてましや邪気に於ら
たれハせまじたらとてしむたまえま厄てね私

の定らぬ風の吹ころハ人のこゝろもけしからず
ぞお思ひしたものゝなりて疾ハ時節の変より
うくるものすくなく風ハ百病の長といへるもこの意
とわりえがたる事をよくみていふにはあらね
でついでにいひつ
喧嘩ハ何法をむねとせられぬ
六 大切なる日が二日ある義の條
此句や涙ぐむべし大切なる日が二日あるとハ父
母の命日なるべし義の條といふ所ハ孝子
をしく泣しむ父母をおもふ子の情此字

ふにかけし入ねの條をきくにも思ハず涙くし
たとよみたまへるこゝろハ父母の事をこそいはれ
きバ此の句が身をもいましむなら ひ喧嘩に
論なども其かゆかにもたち向ハぬ孝子の情が肌
しむべしあげくべし依皆をたのふれすと孝
思ひろから我身ハひとつのふみなるものをバなど
我さら小けらむけれどもさきなうでこの附句
をきれ人や何る仏なし 芭蕉翁評
まゝ仕がどの案ぶけハ皆 出家原
奥の世並ハ近き 兵の 化

此弟子は奥州より任官に京へのぼる出家
なるらむ。かれが大なしに豊前の守をいひ
たるなり

赤銅鍔庭の正面

しらぬ娘のこゝろ見えしづ免

これも公家の名寄なる附句にて人のよくしれる
白なりつけごゝろ娘とやいはむ息子やいはむ
たゞ家にものなし。ゆかしく思ひみだれ
此娘のつひにはこゝろとめしづめ乃方は奥州の住
宿にひとめねらく小庭の赤銅鍔にむかひて

ならむなかりしの娘をとむとしばし口惜く

鳥籠をつらゆと見て松の風

大工づかひの奥にきこゆれ

其白木綿のりしたゞて発句をはじめ
ゆまじく乃小鳥籠をつらゆと見ても大工つかひ
しらぬ宿とりて奥には木綿より大工つかひ
乃きこゆるゆゑこなたはゆまをつけたり

米搗も乃ふはよしとさくゆゑこ
から弟で市の中をわし合
ゆきわたるところなしや

月影の雪も匂へる雲のうへ
しまふく袴をつけるかなかれ
俳ぞろをたゝ日も一日かゝる事出でゝしまふて
ろれし袴をつける年中のはまゝ
鳶(トビ)で工夫なしたる照陣
されがらす前にもよまゝたる稽の番
お白ざるの寂日ハかならずよたゝ日和なりと
きゝわけてもいつればいつ照陣の式まで工夫はな
もこともりし稽古ろの人を稽古を見つけ
たゝるハ俳の公翁れ人を称するをゆく稽古おし

をさなかりし男子でおれをいやしきものゝ子
思ひちがひしがすハ何の稽古どこの稽古な
ど云ふもよはるとぞと思ふより人に語るは
まゝれて八歳まで日和の工夫をも志てらし
馬に乗りて經ひ初れ月の影
尾張でつたしもとの名に成る
いかなる俳ぞろなるや
哉くら村へぬける道の辺
昨草ぬ鉢(ムコ)も舅(シウト)もいろく
百姓家の一村にて家も古く田畑もちち小

金もあれバ村中に口きく男之ごとくなるがならず
難しより村へ出居迄あり
笹花を捧ふつける　挟翁
歟こハなる卯月晦の末
笹花ハ何ならむ尽がくるのけしき見ゆがなし
足がへの分を舟へ飯くる
對付し弥翁来る月の名乃
お句ハ和つきの清まで　同座なんどに至る
滞留して居る商人の古の律乃羽るを仕

難しだい久しく舟に乗こみくれの津ゟ
ゆく人なれバ先足がへの分を舟へ飯けし
なるべし　接白ハかゝる所へ對付し弥翁の
丞えより来たるをとめて志ろね入る
弥翁ならむ
二句の會きかゝる時　飛きた
臺笥（だいす）の間もさぞ候　侍
ごろごろとなる音のをせよや
かはらがよれバ　流　飛　来　能
二句の會がきこえくる時ハいつでもきこえきの

なる時べしかるに何がし殿の太夫にてさきに
人々のおかしくつどはせたるに甚四郎の頭に
まづくひつしり侍の居かたるをしれバす
こし時節の犬もたえずになりて私
をたとの俳諧之ふりいとけバ是も時節にし
むかしいふ人ハ二斎の會につらなりたる人なれ
ども人々にさそひて主人をまちねる
侍のいふさましてつけるこゝろくとめる
俳ころを引結じてたゞ武士の大座敷と
見えて甚四郎の頭まも侍のつめねる小奥座

の何くわしてくづらくとあるさも時のありけ何
きなかまのぞ見てくまね私と甚四郎の頭にね
私侍一人なかずしと代れてさゆく座敷に
つけさり尾の句ハたゞくづらくといふよりも
年からをつけたる一旅之代れどもあるさ
どの着清いまづくのハでからかの其の座に
於まちねるあころすわりくづらくとなるさま
やでも尾にやはらかむと思ふ人情をつけり
髪結たやしく　見え盡へる顔
座敷にハ灯りつける蓍の目

撚織　きぬ糸　角力これの帯

二の句はものまくなれどもさらした付句之
着しふ今はひてたしかなる人のやうは
まてかくちたびたるやうにてうへはしもと
けしかく紀ふ産物にり好いけるくされバまと
とふるなる人多くなじめハ法新の人なかし
げんハ結城なバやしておかる之けてゝそを移
おこはけまよしたり後の句ハ角力これども
なよせく帯などつくらせく俤ふる俠客（ケウカク）
の宿にて産物くハり付つけるやうさて

たなやうなるりしたふさりあてつけたり

夜明の星乃ますぐひとつ有

借ふ弟侍（ヒタチノスケ）も　花ころ

白　いつじふ石の飛ぶり

まづ夜も明きらで空不のぐらく星もひとつ
ふくつおる頃より嵐山などの花見人のと
いとひそやうふ出るるふけ借ふまハ亦た侍升
まのおりぬともよいのさきのとなれバよろこ
びていさみゆくといふ付合之のちの白ハたぐろ
こらのやうん其もるもがてふい花ハさこしけ

うかれ〳〵てつじ君の句 おもしろくさな
出る所はまことさゆ
手跡のをもつて人の名をとふ
本膳ゲ出ればたのしかりけり
筆を嚴シクしく 硯をつゝむ
はじめの句は付ごゝろハ宗のまうけして本の
く本膳出かけしとはる時その宗の者がよする
るをしりて外より来る者は手跡のをかし
せる所城経師などするものもち出て何某
男とかいづれの男ふまきてと名をいふといふ付

合なり 後の句ハかの本膳乃宗の内のよろこび
るにてよろづ取大杯にたまゝ筆をくゞりて
硯をなびくしくつけるえかつての手水のや
うに覚へしうらみ有と見てつけたり
松風のそよむくと吹 秋半過
さて〳〵すがゝると 告る門妻
付ごゝろ前ゝちの句ゝそより 松風そよむくと吹て秋
きたるまでた秋中をふ門其に子をさてて添り
しなるべし さるをつまのきゝつけゝはる
じの家をたゝたなきてたまなり

馬一疋に　鞍置を　射ける
小でつちの時から居る奉公人
瘤(コブ)がなけれバ女房　気もつ
二の句ほきさとろなし後の句ハ滑稽之
小でつちの時からつかはれたる男なれバ今は
家なども持せ女房をもたせたきと俳之時きバ
かゝわでまもなく瘤もなくお庭の男なりと
ハ女房気もつ人のことバ成べし
はの　様から　蚊　柱が　たつ
二の丸乃光かゞやく金屏風

夏もあがつく　ほむの　許ね
大本の様より蚊柱乃たつ系ハ諸中の院まと
見えく二の丸にハ金屏引まりしく光かゞやく結
構なは館をつけより二の丸三の丸なども以
く館の名残りつより諸侯乃屋敷ともは
新きえの古き句は穴新き句なれバ丁度より
つくろひて館の掃除など奇麗なるを読侍
の登城せる躰なれバ夏も付つていへ
ほふ金屏の躰は取つけて光かゞやくまで
とゆかく其の句をいはしく附居し後句の心

なほてお白をいましめしもまさりしもまさるとたのみ
はまのとしなべし

兜(カブト)松風通ふ庭の立枝を
の涙別は人にむきたばせて
軍書ねぐくりのまぐさえ何きハいづれの軍
にお立とくかねてちぶり家し女のもとに
わられを告に来りしに此度の軍まハ給ゆ
て討死きべけれバふたゝびはふすかなふまじ
きなど涙ながらにものがたりてはなちなどい
ふはまえまでやろの女乃もとより物具(モノグ)見し

て立出給ふ兜の涙をバかの女に給バせたくありけ
ればかくにかさならしたる松の庭に立た
給ひゆ
たまへしか立の馬刀貝(テガイ)立貝
とくと来て妹背(イモセ)かくらふ
お白ハたぐいひのべたる妹の色まで給ひゐるから
ろなげきまで後白川松しく思ひの外此恋
をつけて給ひ仰なり白気ハきじめハともはいやし
からぬ人の恋の何やまちより給まじくに給さら
ひてつひにともとまでなめてもともみ給ひて

あゝろつゆもりへぬせつな時中之内まじくふと於
向ふハひなならべたるをいろ〳〵のくるふしてはひ
たるよしにとなり

喧嘩の中をむかに川のけ

仕合と矢檐乃舟をのらなむぐく

附合矢檐の乗場乃喧嘩と見立て附之たゝ
へバ川ふハ風ハげしけれバ舩出さて待どといひ
いや出さう〳〵といふよりいひつのりて喧嘩ふなり
たる事をいふハおん舩あくらぬ日と思ひ〳〵ついに
舟をものらで喧嘩の中をおしわけてゆかし
が何とふてきけバ矢檐の舟ハ風波ふ損じて
人もけがしたりなどきゝてゆく〳〵ハ求ハ仕合
なほもおなじとよろこぶ内また公羽のつけ句
ハ句〳〵かぎりの形た情をふくめり

せめ〳〵と泣子をとん膛ふつきすえて

大工屋紺屋乃　何執着是

内ハ大工も来屋紺屋も来時いろ〳〵内ふ泣
子をとん膛ふつききてえく益在ふの意語なる
るべし

一里の船も後のさきたる

山ハ皆蜜柑(ミカン)の色に黄ハみ成て

此句蓼太が芭蕉句解に第三をしろく発句にならんといひしを伊賀の桐雨が蜜柑の色といふ集に出して付合のうちに句なるゆゑを何がせしにのち蓼太が悔て今こに出せるよしかけり蓼太ハ君子(クンシ)なりけれども句ハもと付合の句なるを発句にもきられたるゆゑかゝるすハ外の句にも何かなき事三すもきられれるゆゑに何がれむなつかなしともに児童の何らそひたりけり付ぐるれ

山崎より山崎へ一里のほとりまで舟中より見やりたるけしきにて後の世までさぐるといふに蜜柑とつけるひゞきたえ

せん度の風に人死がある

水くさき子日ある哉　郷呟く

されバこのゝすをさぐりつける一茶之一ねにさるすまうこのまねするる之大風に宗もくづれびくしし人死ぶ子日の葬礼のさたまじく有る

となり

衛に今ハなきよ　かハせ紙

かゞか
減の茶さつりとのむ
これも俗の人情世態なりし是非のあまりに
ものわづらひして癪氣をなやめる人と見ゆ
かいせんのつかれもいくはくと手習どうりたる
かやしくとさしよりたるなりかくはゞ身の上
乃人ハ年中茶のむはまくもとふさへらなり
上を見てそこらをはそふ墓其
手桶など入れ持ち通りの跡
町まちのやうきを見るがめし上下の上だうり
見えし近所の人乃墓参をはそひつるなる之

後白もろこらの場所まくりふハ何がし寺の
外通りして家くふ手桶を出しるが様ふ
て入れてはまえ
墨ころく高だ梅の本乃あれ
月以後はちひたき門を出つ入つ
苗句の梅の本北森乃墨ころく高起ハ寺寺
寺ら或ハち両らと見ろく大門ハたくふくだて
ふつより人の出入さる保月の比花の体との
附合たるべし
何某に賦筆付る俳醫者の供

新茶のかげ乃ほいとしく來ほ
醫者ハ肉へいりてもぜなしをしてゐる處
ニ僕のひとり給かりぬる三月末の比ほの八ハ
定なるべしうちの何かしも仲よき醫者にてと
もにうちかくらひ新茶など出しくもてなんけ
るの句ひぬぶつと來まくほえ
落雪の一座に應に降りし
前ハ見むと　次の田樂
うき世の降わりたる夕方は前には釜な
どかゝりて見むとしたるには次にハ田樂やきて

酒のむならむか
手拭絞く折ろきて牛の荷
判
川ひとつ渡て宿も承行
お白ねなりわかりの時まえ手拭を頬かぶり
といふものして牛を追ゆくが荷ならぬ体
手拭をとりし來り後白川て八牛追て川を
わたらん体荷なしかへたる時まゐりたるも
のふといふみて姿のかりしたもこそ
方く一醫者を川さする蓍の月
踊の作法誰も折ぶえば

盆ゑの江ゝら寺の音頭して
はじめの句乃きてあるてハたやりむしの發句者を
ろこふもさゝのも川たりゆくさびしくなれバ雅句
よそしハ蓍るの月といふより　踊の作法を知るもの
なたゆゑんさゝえやをた發者を川ぎりけ
て踊の作法をさゝ川後は附らへたる滑稽
なりし翁の句形わし此格之お句ハたやは發
者なる我ほなる發者にとりかへたるゑぞら
たなりゝの踊を又のちの句ふてハさるの音
頭の踊ふしたり

ほしげはものゝ菊をやらはて
蓬生(ヨモギフ)ふ衣をやめてる　男ぶり
わらわし時ハ名高るたいろ志のよれさてさゝくし
たそのとなりしがいつの不かどよわら思ひひらへてう
きゝるめまハつゆたちましらハさて蓬生の徒た
は者ふかく爪て菊をつくりてたのしみは人の
もとすり世の中れゝ川しかなしさふなれて
何ゝまで思ひもなりしはなれバほしげはものゝハ
つゆなしまじく菊をわくるとその附ごてろなる
処たり

湿(しつ)のふた出のかかた　南風
丹波から往もなくて　啼鳥
読ふしわづらひて古園をきてふ人情な
らむ啼鳥といふぞ哀なる
それ季が来れど利よさへせぬ
雪に出て越(かへる)責を遁ちらし
あはれなし
只京中に月ぞ冴えける
都鳴のひつかりとしるく此清もなけれ
其秋の深かけま京中よりハただ月冴えて都鳴

の一葉さそゆるかさきこえたりふて稲妻のひつかり
しれ侍まし詠ハただ月ぞ冴えけるといふべきといふ
字はよくひびかせたり
まへやくりがやとして　筆が捏ふなる
奥の院をづく花をたしのぞ記
おくの院へ十八丁ぞありよぢのぼる途中にかかる
とまへやくわがおらわて吉ろわ侍らわしがつひふや
みろく氣が捏う奈わしといふより奥の院ハ伝
となくそくらおろろしけなるものなれバをづ
くはしのぞくといふ附て成ならむ

春の日に彦家の付乃つくりかと
かいかくや　涌漬ふらむ
よく世離をつくしたる句なり春の日にも
くしきれ姉妹なと立かへり入かへり彦家
の付をしみるに一度ふものふすもならべ
たるすれにすれみるなるべ……
いろいろしく皆股（モヽ）立（ダチ）を取並び
目
つらも何らぞ霰（アラレ）降なり
おひを按勝の出立と見てつけたる之
遊ひたる櫟（クヌギ）林に日がくれて

俳の本地をつむ糸たく
いかな附ごころや
さろくと臼挽出をバかそてきん
ろぐろ子草のくゆる　艸縁
郊外（カウグワイ）の居れ住侘たるけまえ艸縁に草の八
ゆる宿ハさろくと臼挽出さむほとぞれも
枕ぶりほべしかくよく本を定めて付句をす
べし
此二重の素げる点にお思ひ
わらい体らわせりさて靴

前句ハ長く我思ひきる人をたとへていへり何
ながち我二重にきくるなれども見へたる人乃
行末をいふ之條句ハやりり其人にて我思ひといふ
おもひけし此人成たる時より我ぜりきは人
なればまして我思ひの有る時ハなほなほ行ら我
をたのまむと之我せつめハ我になれしく何
すれも我たのこきは人をいふ之
鶉を又ぬきてまはしけ行の月
白田ハ何ぞろく　山葛乃花
町ハづれなどに田地なくもちて鶉何まき飼ふ

人と見ての附句なり
日暮へたむかひ下きて　秋の江
られぐ　たのむ　才の　すり
夕風に蒲生(かもう)の家も野わ行
ゆきあひりて才を日暮のゆらゆらなれへたのみ
下きての方はなち白ハ石のわけをいふあてろふく
蒲生は家といふを蒲生性の家もたえると
いふわれきらせて夕風にかまはりと志なり
をつけたる他之句意ハ此度行るゆき何りて
蒲生の家も絶ゆるみすりられぐくも才

のこりをたのむとつひやりたるところ夕風ふの
五文字ありがたくこそ

花のあるうちハ雅山をぶらつきて
蕨くれし 乾 黒谷の 蓮

前句花のあるかぎりハ花ハ嵯峨ハ東山
と目くふ雅山をかけあるく内まへ修白ハ上の
内まをきくにつけるところハ黒谷とひ
たよくいひかけたりんをつくべし

寒けりに菜の下を 吹立く
石町なれバ無縁寺の 蓮

淋しさのかぎりをつくしたる附句之大病の
人の命柊をしらく菜薹ど水たらりなど於し
き冬のはなれバいと寒し病人のとあらむかく
あらむと薬じある不ふ蓮の花かれさこゆ
るもおきぐくもしや無常を告るふてハある
ほじき犯人などハまぐくふ思ひわづらふハまう

呼かへせども まけぬ 小 鰹
秋さを於て借の胴菜のとあふて
此句をおもそれりしたと見へ 借を示の
むつはじたふたがひに於菜をのをあふはま

なり奥羨の小鯉を賣りに来るをとも
じくに在ぎはまぐく浦ぢかくの里とみゆ
梅 須ふありつきたは音の月
無 住年なし 寺のいけらひ
前句梅須ふりふもく降る梅や姫もた
えたはふきよひハ音よりもれて月も懐なきす
げくく寺ハろれ河ふりふて住おのなくれりて梅
ハ下司法師どもがれのが老てにいけらひある旅之
七たく 宗の くけたては お
なれに森む 一孟て青た 森が へ

俳ぐてろ花見てゆきて宿のとまはべきなけ
まばちひけた家にたひて森くれハちたたく家
すらくたるおまでもたくはたとなりけれども
去年の花たなた中ふたゞ一孟て青が下て
何くらしきふろの上ふて森むとえゆしたた
旅森なりけり
竹 檜のうちより 霞む 嵐穴
馬の糞ハかく 汲もいろゞし
おも白竹檜の下まぐろちかきそて嵐穴もふ
るえ梅白馬の糞かくハろの檜となるべし

季なけれども句中の春を見はがめし
とハぬもわろし　婆ゞの弔
梳りゆに来れどおふし　東譲

去れハ引ちがへたる俳合之かれハ婆ゞの年忌の
とむらひせむとて梳りゆに来ぬこちらハ東譲
ふて客の有る内まへ保めくりしくとらバ東譲の
家ハたも居るく婆ゞの弔も保ふハ借家と
きゆるが梳りゆに来られどおわるく東譲ふ
て梳もかれぞ内く婆ゞの年忌も此方よ
りとハぬハ何しからむと心づらひしたる内まふ
とりなしたり

秋何ろびのふけるく床とる坊主かな
百里ろのまく舟のきぬく

お句ふてハたゞ坊主衣の秋何そびふ出てふけ
てもどりしきぐく有れど後句のころハ淡乃
花女などを買て何きの何けだれ船出さむと
いふ手秋ふけてはられゆりめいしふ船ふ森る
内まならむらならおぐやらならね

よゆもろハきぬ中ハ生　延
いふくほど詠ふ生なむ月のくれ

俳の人情世態

擂鉢に植て見ず唐辛子（たうがらし）
障子かさぬ数宿替の舟

をとした付合なりけり舟ひとつ宿替の荷
なつみて其ての上は障子をかさね曲突（へつい）の荷
には擂鉢に植たる唐辛子の赤くらけく
体も何るべし前句の唐がらしを宿にて
つけたゞの事なるべきに宿替舟と備た
るは誰の又か
考てよし壁まゆり此花だらり

百性やさしむ苗代乃深
花のけじめを考へよしのまねめ京人々と
和尚されけ此百性の苗代村もみて深やさしみと
見てはし付合よや
此ひと言も粟の此年貢
七十ふなほをよろこぶ助扶持
前句粟の此不作不出よくれ年貢にも粟をいれ
てまつるなり付句ころは此国の風俗にて其の
守より助扶持をたまはるなるべし此れバさし
よりハ扶持をたまはる年よくよろこぶさまなるめ

粟を貢する古風なれバ何るべきさまとこそ
よのこゝにしもうらぶれたる政なれかへさくしもさ
かいをたりぶれるといふハなにごとぞや
三尺へ通り道のはしりけ
涼しさハ竪田の出崎よくきこえて
涼風幽居趣
蜿とは牛乃方紀やさそむは
墨深に寺の男れまてみ入り
いろなるかそとめがくし
せんはにもどる　旅のくるびれ

評
結ははきのにをくひとねく
かくまでく世態ふりくりたるの何やし此み
まことよ人なうして泣しむなし　古白人亦とれ
てふし（へ乘結などふゆく人の身はさ小十里ま
何る不を日かへめにきそるなるべし　附ごころハかく
だりへがらく見ゆる世の沖ふくらし山しづもす
める月かなといひはさてろふく ゆくもく世の
中ハいくめがさたものかかくだりめ身を粉に
してもにハくひらぬきものかと何れこれるこ
をとりよて　古白れくつりいとよし

尾は尾をつけし　出きて主筋
田の中に堀をぬ　石の年ふりし
これは世に聞ゆる付合之手筋を人に示さんと
らむとて尾に尾をつけしいゝしくおもしろかたよひ
のしは人情なり　付人ゐのまゝ筋ハ田をはなれ
こしくもちたる家農と見て年久しく持たる田
か中に大きなる石の有るがそれハその田はぬし
などいひつたへてむかしより　堀のこるまなるぬ
石なりとかくは作まいらすも百姓どものおかく
りなるべし

芝ふみつくし　月　跳　なれば
花の時能ゝ父母とめて度残らんかため
付句ハたゞ花の陰といふ五文字ぞもおまてつけ
たる之句ハこと高き人のなく跳めたるハめて度
なりたるをいふ俗語句めたゞ花の時分に能
父ハ死れたりといふなるべし
庭に庭ふ青の能採を引ちらし
匠は塀に汰よおきて居ぬ
若句ハ花びたゝし松葉採を庭に引ちら
したるさまの句ハ子ども松葉にて匠まね塀

すもゆるたまえをべくとどもハいそがしきもの
なれバ其句によくひびくこれ
麦飯ハせ祇縫のごとく萩の岸
の流をいくむ千代　先
うららの人ぬなるべし
年よめく身ハ足腰の追ぐらし
追く涯のむ家ぬ力等
無益にまよふ事を追ぐらしといひたるハ
大津馬の追ぐらしなどいふ任途省等句の
あくるハ生涯足腰の身よれ花なく春ともいはず

まことに追ぐらし誕本にて人まいやしめらはく
ちをしけよくみを恥そ思ひ恥そたるる後
句も一通りハやりめるの遊懈して須のむた
はとえ聞れど常にかくハ思の内家に称の等へ
ふれて涯たる之汝ハ年久しく家につらへてまめ
やかなるものなり恥どたとどバやされたるに
何めがかれてもかくてまことに家身ハ足腰
の追ぐらしと思ひつ依に年よりたる依も三六
がく依冥加なれ時に何ひつ依よと涙にむせび
く涯もえのまぬたまふとめらへたる依乃

公羽の好み版之

稲

どゝしと撲ふ風の何ゝ候さる

盗人の褌を解や候

お白ハ言え於候まで之たで道中のやうきとこて
いハゆる種をちらし畠盗人を見かけたるを
ゆるして解やりたる物不附なり
月見れバ秋ふ不足の出来ん
こ候らく露ハどこへゆくやら
お白月見れバあはれさのまさかなしみれ亦
みひとつの秋ふハ何らねどいつ候こころよて月

を見れバ時までの思ひ出きもの有めとぞ條
白ハ何ともお白れとらへ不奈乾ふたで月ふ左衛と
つけらくいひ隠したる之け格をよく学ぶべし
俳ふ剰る何と波むかめハ誹諧ふて

付て沈き　鑑方の家

田を植候向近江の　稲乃去来

えうどめの白いハゆる楽剰といふまうくむつりしと
たで剰きてた候之二の白れ附てろ解しがさ
し條の白ハ鑑方嫁方といはれ向近江とび
うせうゝ候之たるて双方豊家ていゆうみをとらせ

たほなり

朋

風ひやゝ手さわがしくの雲

梅に角力の相手いくつられ

風ひやゝかといふより相手とつけたる之

孫之はへ御勝ともの事社大慈

言まはしまたは音も遠れ東風

御勝ともを上手に能めの扱と見て俳諧なり

孫之にまつく談るの古名をとなふるといふ俳

諧之附ごころハ只やふの扱もまでに言葉つまる

もやゝ音色より何となく其ハ薄れるまで

たゞく東風よしとし吹来ほゆくハ御勝ども

の人乃孫之時分なるべし三ッ一言ハ御風の

町なるらむ

赤げやと世器ふ売の紅葉

負軍御者に引くかつ尽きの

お白きこえかたれどあてろくにいふるさん

より老人に紅葉の衣をはふるにたハむ

きふ何まゐよきすぎたるがふくれに剥げやと

いひたるなるらむあはれき世能にはなるすゞ塩

白髪ばかしくつくめたぐめきべく軍の白

ハ何しまでもをかしくつくるはならひひきかへて
れしべしひぐるゝはちかふ筆のたくみなれど
いへ体も此格之附ごゝろは大根のちぢむをも免
りめて発句段下されたる之起ごゝろは美蓋
が強の直蚤を宗盛にもちひたる体も何らむ
見そそしく懶へ這入体月の友
、庵の雑水をさくら体小男鹿
附ごゝろ山里のかくれ家にあてろふく住まし
たる体かくへそろしめたる友の二人三人つれ
だち月見に来てとゞめたる之何くまで月を

見つくして今ハと好屋へえりめく森るゝたまるめ
様の体すぐく小男鹿の本体庵なめらかなる体
し先住居なるべし
何くうに綿子とらせむ　弱法師
此　殿医者体じめに仰えん云体し
弱法師をいたはりて綿子とらせたる人ハ家不
人にハ何らでんくもつきしたがひし医者体
ごつめ体やごとなれ体すならむとの附合
なるべし
挑灯見ゆる　町の入口

女房よぶ茶屋の亭主兄やぎて
町の入口まで挑灯見ゆるハ嫁入と見しころの嫁ハ
茶屋の亭主乃婿づれにゆくなるべしげにこそ
茶屋はすゑ主は兄やだれだれといふ滑稽之
甚文きき紀行の趣ハぬきたえなし
たゞなき風乃石菖一束る
されも名高き俳句之おかしかざりめつらしたけ
き趣を引たちしく軽くうけ流したるまことふ
公羽の手段ならで候ら及ぶむつけぐ文紀行の
修六の氷乃ぬくなるをぬきたえたりたらむハ

六月も寒からむかし床きさゝげきる白の次にハ
何となくとくした白萩つくる姥たふたゞ甘なのけ
しきのゑを何しらひてまつとふ甚とむふ子風の
たゞな乾くしきねのべたは水ともろとも寿ともなく
ふるにもの無し
江湖披露の田舎陸尺
とつかのと秋に入月は鳥羽縄手
はきるちくろなしや
粽くちふ比まく一つ葛の葉 素
さそむばとのびる 男 兄才

上ニ同じ

一度ハ江戸を見たれば小商ひ

店(ミセ)従(つゞ)くむしく新の商家

若き小商人の常情にて世の中思ふまゝにも

隣のまへゝならねバ江戸へでも出て一かせぎして

見てくれたものと思ふならむり惜きもろもろの人

がらいろもして立身せバやと思ひて新作

まる時まえ

耕(カウ)作(サク)

若くハわするゝむくろの本

作のこゝろをよくし保新田

むく鳥のわらは江戸へ新田も吹て耕作のこ

もこゝろ之の時分付之

店なの縁(ヘリ)え(ヘリ)世産(ゴサン)も若やぶめ

なの 降日なかたつけに五里

おもしろき付合之お白店なの世産も若なる

人ハ人とするゝのもせぎ新へ出るゝのも嫌ひ

ふく一日たゞ離絶して居るのをたのしめる

人と見てたゞ耕し時の何すめる日記なとかさ

くりふ八日新りふハ若などくりしくかきつけて

おくれまえ時れども記をかくとせバ付ぐろも

古く一句もつくならむを其の作者だくみたるを
かたつけるといふすく一句新しくなるなれ
はるを除く思ふべし

切

藺(ヰ)を刈 ほげく門にひろご侍
ふるで何ちら出ちらへ晴れ何ふ
お句を示のはまと見て儀を示のむつまじき
はまをつけたり
うろこをたゝ葉の行(カギ)に待たれけ
袖ふかなくる 前 髮乃 露
きりした坐の付句くきさきさ云葉の行

とハ必待ぬへもしたぐひなバ忘むなどいひしを忘
ろうしたるに思ひてちぎれし示ふ行く散ふ
く侍まで待ちれどもつひふ人ハ来ずてやみぬる
はまえかつめくいつりられたはなほべしうそ
きさとふ文字甚ちらちかめ條句ハをを
はなき人の女ふはられたるとしく前髪なか
などめまちある姿なつけため

樸(ボク)

かむくと有ぬきたる柱
樫らけくりふも又く侍
冬の風情是きめし

ちひろた顔の身だしなくよき
商もゆるりと内れ於れまめて
むつほじくめでたき内の内まえ商も繁昌し内
てま路中もよくて女房もよき人のちひ内さ
熟ふ今やしなうぞけハひてむとなした姿
ならむ
秋来ても畠の土れひびわれて
雲雀の羽乃なえ搦ふ声
お句ハ残暑れなげきいまえ附句ハただその
时分ら

濡筆 筆を志らんりけどめ
臺の硯碎てうら砕の本ちつきて
内きるさびろなし
借揉な者を汁ふ切入て
店より菓子 家ハひつとむ
前句ハ借揉な者を料理ごろもなくむけ
ろれふけよ切入つといふさびろなるを後句ふ
てハさびれ借揉なる料理し金もちの家
ふよ外れて馳走ふ何のと情さ満ふつけくめ豪
家富商の人の家ごろめふかく情が於ぼゆべし

國から来ては人にものいふ

閑(イツガ)しう一句揚て　作者　座

これも世態をつくす俳合之前句ハ何なりとも

よしやくへ其江に出る男たれまゝく同じの明暮

なかゞ京家わなどしたるつれでれ尋ねて来

されども招にふ召もなくいつまでといふところ

ふところにて俳句よりてハその華やしたる男ハ國

ものハ古のいやしき者までもなれども都に

ては句まで揚て艱(カン)難(ナン)するさ候ひから来れ

作人ものへおいふ召もなく句揚志まへバス王

人の性に出るもの付けえならむ

抱えく松山底も　有明に

何ふ人ぞふに臭くさたなめ

前句月もあからに居に松山を抱えく雁白

さりしたえ俳句旅宿のけしたと見て何ふ

人もく僕人なる作まえ

此れの上下れ気の宿ら候て

嬰ふ枝さし　宿乃氣ちふひ

前句居中のしきさなるをたゞちに宿とつけ

く宿なくふ何る居に作まをのべたり

ゐなおなしに恋をさつくれ
蓮生ニおもしろけて 伏見殿
お白ハ若き人の詮先れわきまへも無く 庭ニ何ニなく
さぐくなるを仕持て 今ハ思ひもなれく伏見
何くわれ候 任故たのしめる人くしたる御めえ
からたえ
吸物で座敷の〇〇をたくさる
紀後のお場を又 まて来い
大坂何くわれ町家の内まなるべし
降まで候何らしとそれの一生さり

其のひらふらく 離為ユきてる
またもなたく体化之何ら扎き扎の言さ日ニも
離為ユをさ候といふさてろふてまのひらふく
といふすく言さ日をに用ハせたるゆく一句
ハ軽くしたてみるえ所措ヌ種えをなすふ可
まけるさられるり
何のんおとも さられぬ 大きなた
宿くぐく 此のへハ執喧嘩御酒
お白ハたて本外内の心を乃何しもさられぬと
いふくろなるを悔る五年のさぶくを

ちはよき見つけ所といふべし
八義の花ハなくし　仕進の至
船ハ藩の　储乃　時分ハづ将し
盆を思ひ入れて　積荷する績の船まむ何し
くろく八義の事もなれバ時分をいづ得くといふ附合
なるらむや　仕込んめしいふにひどらせたり
足袋ぬいで　ほきて　屋の陽炎
年
陸ちちひ防きやつら　依させつく
手段の礼ハ先ヅ屋まづくに近不何くりを待るれ
ろく屋ハ志ゞらく　家主決め　足袋ぬぐと

いふ附合なり
行灯の上より白き　額つき
見えし琵琶　琵琶をどつりめとれく
琵琶一曲弾語りて行灯の上より白き額の
見えたるハ推家女
娘と婚平　めるにをさく
家内ハ皆寒くてさぐる火燵の宮
何わの床しく之
髪結く　町に出る日の紅月赤
末子十ぞくり　柿衣たしなむ

紅しい時の登城などいふ時の伺ひ侍座敷の柿
の木なのめおもしろき附合なるぞなる
首にものを　かぶれば掃除は
それ咲て茶などつくりける京の山
掃除はといふより茶を好む隠士と見て京
の山に茶園をつくりてたのしめるさまをつけ
たるなり
窮屈座敷なり　誇　是はなるめ
蝸其角のちひさき家にかくやさしくて
世の白を誇るなれぬ人と見てちひさき家に

のよろこびをつけたりかゝる書は蝸其角を見て
ちいさく家に居てこそたへけれのちのちなるやうさせて
角力にまけたといふ心もおかし
山伏は山ぶし　村乃一か條へ
村の祭に角力などふれなの心とそと人もいひつこ
めたるが思ひの外にとりまけて面目なければ
此後とくの人山ぶし　村の山伏ならバ一しほ
をかしうらむ
焚たしく朱れにゆく庵の花
たかきはげさて　春の風すぢ

前句ハ山かげの庵なく　薪とてもたくハへおき難
ふどづく山に入りて柴をとりて来ぬ事もありなむ
後句ハ庵の花といふに春風の吹かよひて匂ひけれ
ほがらけしきたゞ春色を酒にてはらひたる之
むかひのかしのかゝる　皿の凡
一汁ハ代をもて来ぬ　酒乃粕
かゝる句ハ洒落にみえく郭へつゞきたるに落
ほえある句ことふよらぬ句之
鮑(イタチ)の若　椀もとの先
箒(ハ)木(キギ)ハまつぬふたえて茂る之

前句ハ椀もとの先に鮑のなく不を古屋敷の内
まで見へて庵をハ茅茫(バウ)として箒木ハま
うねにたえる淋しげなる住居のさまをつけたる之
まげらく　岸に休む　代士
衣見へく　旅する心まづゝ　なめ
つけてろいゝなるらむ
大八の通りかゝる
諸えれ　額に　編笠も見えず　挾(セミ)に跡(ユウギ)
おお句ハ何まりり雨たれ小路の大八車もみつりかね
はなつり後句ハたゞそれ堀にて諸えのいそがし

けふ浴(ユアミ)もせず髪もそらず雨に立も見ずては
なくとし
鯊(イサゴ)釣はなれり 温倉の浦
大なるのわらめて田にも畠にも
ほえなし
立ならび見えし 宿の糟
秋もつれにて継母の泣なく
ふたりの手をひきて遠き所へ旅立なとする時
まことに附合よや
物らひのわるき子を負る僧

冬枯の乳母をしむ やれ露径ひ
寺などれきぐくよや
間が両手バ又見たくなる旅の杖松
ともに手よる 逢坂乃杉
いづならむ解しれず
あふちかけ見 君の両ゑぶれ
篠(スス)萱(カヤ)を目利のうちに片身く
上ふ目し
かけ物の布(ホ)袋(テイ)の顔に月見して
百のやいとに なりぐんなく

百ところの客ふ白もくれむつひたるうけものゝ
布袋の顔に月も出しまゞくさも鳴出たら
むたゞやいとよきりくれるくといふをうしこの
附合之
かちわ舟ハ舟を先ゞ浮ばなり
吉野山ハのちらん花の咲揃ひ
河内のましく之
若殿のまゝくれの中乃大わらひ
京ミらのふ旅宜も宿ふ下めし
旅するなどよや

翠簾屋の屏風ふ描く猫
画新ふうちかはしくる戻らちハ
惟白も屏風の画之
霞ふけれバや是相の絵
子どもらが借る家を何らそひて
ともふ松の小出家の何るじたらむおのれつ
たいらむと何らそひて今ハ是相の宅絵を
もうちけせるどのしはれまの附てろハ志
よく夜でろうハ伯夷叔齊が付も何るべし
猪えふ下知の烏帽子をかぶれし

幕を去ざれバ皆笑をとゞむ
　心えなし
垣越ふちよつと盥の礼にて
薯蕷のうちハ小屋で火を焚
　借れ盥をかりるハ薯蕷場のはしまりと見
　えつけるゝ之
彼岸のぬくみ迄でかくはる
青芝ハさをふもえつゝあさみの花
　南都春色目前
上下の橋乃落ゝる川の音

ゝ一田の中最鴫乃はたつく
浩水様（コウブゴ）のごとしたゞ田の中も水におふれ鴫の香を
　おしはかるべし
枝一本鳥のわたりかし
野鳥はされハも雉はぬらされて
おそろしなき旅ざてるハ枝ひとつを鳥のねぐら
ざしても友のこゝろたどりゆうハ野鳥の音
ふも深とどざれむまでとに家中（カクチウ）の情おふす
べし

芭蕉翁附合集評注下巻終

芭蕉翁七書

行脚掟 二十五条 十六篇 句合
嵯峨日記 奥の細道 発句集
右七部合刻 小本 二冊

発句三傑集

暁臺 闌更 蓼太
右三大人一代発句類題して集む 中本 二冊

俳諧発句三玉集

麥林 希因 柳孤
右三家発句集 小本 二冊

文化十二年乙亥正月発兌

俳諧書林
大阪心斎橋通久宝寺町
河内屋嘉七